

---

## 専 門 教 育

---

### <基礎医学教室>

#### 第一解剖学教室

大学紛争の余韻覚めやらぬ1973年（昭和48年）教授佐野豊は学長に選ばれた。佐野は、中止されていた入学式、卒業式を再開させるなど大学の正常な運営回復に努力した。1976年（昭和51年）、佐野は学長に再選され、手狭でかつ老朽化してきた大学の増改築に着手した。基礎医学舎、中央図書館、附属病院、臨床講義棟の設立の立案、予算の捻出、用地確保のため立命館大学広小路学舎の用地購入など現在の京都府立医科大学の各施設設立の基礎は佐野の手腕によるものである。また、看護専門学校の設定員を25人から100人に増員し、附属病院における慢性的な看護婦不足を解消し、附属病院運営を円滑化したことも特筆に値する。その間、佐野は1974年（昭和49年）には「神経解剖学」（南山堂、東京）を出版し、1976年（昭和51年）には Deutsche Akademie der Naturforscher Leopoldina の会員に選出されるなど、多忙な毎日が続いた。教室の研究は中枢神経系におけるモノアミンの形態学的研究が助教授井端泰彦、助手松浦忠夫、野条良彰を中心に蛍光顕微鏡および電子顕微鏡を用いてすすめられた。大学院生赤木好男（現福井医科大学眼科学講座教授）はニューロン標識法を用いて、外眼筋を支配する動眼神経核ニューロンの研究を行い、その成果は教科書 Gray's anatomy に引用された。一方、井端は1975年に Sternberger らによって開発されたばかりの免疫組織化学法を導入し、視床下部における LHRH ニューロン分布ならびに投射について研究をすすめ、1975年（昭和50年）に第二解剖学教室の教授山田博が停年退職したのを受け、7月に第二解剖学教室の教授に昇進した。野条は、1975年（昭和50年）5月より講師となり、1976年（昭和51年）2月より助教授になった。その後、中枢神経系におけるセロトニンなどモノアミン終末についての研究を進め、1980年（昭和55年）4月に福井医科大学解剖学講座（第一）の教授に転出した。学長の任期終了後の1980年（昭和55年）佐野は教育と研究に没頭するためドイツのヴュルツブルグ大学に渡り、客員教授として解剖学実習を担当する傍ら、モノアミンニューロン系に関する最新の知識を吸収した。1981年（昭和56年）帰国後すぐにセロトニンの抗体作成に着手し、大学院生竹内義博（現小児科学教室講師）および木村宏（現滋賀医科大学分子神経生物研教授）により極めて短期間のうちにセロトニンの抗体が作成された。このセロトニンの抗体を用いて佐野を中心に1988年（昭和53年）1月より講師となった松浦、助手河田光博、山田久夫、上田秀一、大学院生竹内、小島

宗門（現泌尿器科学教室助教授）、森敏（現神経内科学部門講師）によって中枢神経系におけるセロトニンニューロンの分布が明らかになり、その成果は次々と海外誌に掲載され、セロトニンによる中枢神経系全体の調節機構（マスコントロール）は大きな反響を呼んだ。また、大学院村部義則はグリア細胞についての研究を進めた。

1982年（昭和57年）3月に、佐野は再び学長に任命され、1988年（昭和63年）までの間、学長として本学の増改築工事の進行を見守り続けた。松浦は1983年（昭和58年）に助教授となり、松果体に分布する神経線維を電子顕微鏡的に追跡し、1987年（昭和62年）4月に明治鍼灸大学解剖学教室教授に転出した。河田はその後、視床下部下垂体系におけるオキシトシンおよびバゾプレシンの研究を進め、1983年（昭和58年）3月に講師となり、1985年（昭和60年）から1987年（昭和62年）までアメリカのロックフェラー大学に留学し、オキシトシンおよびバゾプレシンの mRNA を *in situ* ハイブリダイゼーション法を用いて検索し、帰国後の1987年（昭和62年）4月より助教授となった。オリゴヌクレオチドプローブを用いた *in situ* ハイブリダイゼーション法は日本ではまだ普及しておらず、河田はこの分野の第一人者となった。山田は、1988年（昭和63年）4月に講師となり、ニューロステロイドの研究を進め、1989年（平成1年）8月、滋賀医科大学助教授に転出した。また、上田は、1988年（昭和63年）4月に講師となった。1990年（平成2年）3月教授佐野は停年退職した。その最終講義は佐野が学長として設計し、ようやく竣工を迎えたばかりの臨床講義棟にて2月23日に行われ、その格調高い内容は未だ記憶に新しい。また、12月14日にはドイツのキール大学より名誉医学博士号が授与された。

8月には佐野の後任として河田が教室を主宰することになり、10月には上田が助教授となった。河田はニューロンの可塑性について研究すべく、助手由利和也および大学院生平川誠（現神経内科学教室助手）らによって性ステロイドホルモンの中枢神経系への作用や末梢神経切断による中枢神経系の変化が解析された。上田は、脳組織の眼球前眼房内移植を大学院生松本康宏（現社会保険京都病院眼科部長）とともにやり、セロトニンニューロンと成長因子である S-100 $\beta$  との関係性を明らかにし、1995年（平成7年）4月、獨協医科大学第二解剖学教授へ転出した。また、助手森田規之や大学院生森本昌史（現小児科学教室助手）は、分子生物学的手法により、グルココルチコイド受容体抗体を作成し、脳内に広くこの受容体抗体が分布することを証明した。由利は1993年（平成5年）4月に講師となり、エストロゲンの視床下部ニューロンへの作用やエストロゲン受容体の中枢神経系における意義を追究し、1996年（平成8年）9月助教授に昇進、さらに1998年（平成10年）4月高知医科大学解剖学（第一）教授に転出した。1995年（平成7年）6月、群馬大学生体調節研究所より小澤一史が講師として赴任した。下垂体前葉の電子顕微鏡的研究で成果をあげていた小澤は、グルココルチコイド受容体の細胞内局在について超微形態学的に取組み、その動態を明らかにしつつあり、1998年（平成10年）助教授へ昇進した。

1996年（平成8年）8月に基礎1号館4階から、新基礎医学舎6階に移転し、新しい環境のもの

とで教室員一同新たな気持ちで教育，研究に励んでいる。

1997年（平成7年）4月，河田は学生部長に就任し，大学教育の改変に日夜鋭意努力を重ねている。現在の教室構成員は，教授河田光博，助教授小澤一史，講師西真弓，助手森田規之，遠藤晶子，楊易木，大学院生伊藤隆雄，陸海平，小川弘，謝蔵霞である。大学院生胡中庭は博士課程修了後米国 UCLA でポスドクとして活躍している。また臨床教室より吉田麻希（小児科），竹中信之（整形外科），菊地典子（産婦人科），尾藤裕子（小児外科），岩田健（泌尿器科）らが大学院選択科目として第一解剖学教室で研究を行っている。

（文責 由利和也）

## 第二解剖学教室

大学創立100年より125年まで25年間の教室研究の推移について

1975年（昭和50年）3月末に山田博教授（1985年3月23日逝去）が定年退職後第一解剖学教室井端泰彦助教授が教授に就任した。井端教授は助手，大学院生を指導し，中枢神経系特に視床下部に分布する下垂体前葉ホルモン放出/抑制ホルモン（LHRH，CRF，ソマトスタチンなど）産生ニューロンの分布，微細構造，線維連絡，発生などについて，それぞれの物質の抗血清をいち早く用い免疫細胞化学法により検索を進め多くの論文を発表した。脳-腸ペプチドや内因性オピオイドなどのペプチド産生ニューロンについて，その分布や超微形態についても明らかにし，そのうち視床下部弓状核においてドーパミンとニューロテンシンが同一ニューロンで産生されることを初めて明らかにした。また，視床下部や大脳辺縁系に分布するペプチドニューロンには下位脳幹より上行性にカテコラミン線維投射が認められ，それらの投射はペプチドニューロン内でのペプチド産生に促進的に関与する可能性を実験的に明らかにした。その後1980年後半から現在までは岡村均助手（その後講師，助教授，1995年（平成6年）7月神戸大学医学部教授に転出），田中雅樹助手（その後講師，助教授）らと共に生物時計（biological clock）のセンターとされている視交叉上核について機能形態学的研究に着手した。まず，視交叉上核の形態学的構築について視交叉上核に分布するVIP，パソプレシン，ソマトスタチンニューロンの分布，光顕及び電顕免疫組織化学による微細構造について，また視交叉上核には網膜からの光入力，下位脳幹縫線核より5HTニューロンの入力，外側膝状体からNPYニューロンなどが入力しているが，それら全ての神経入力はVIPニューロンに入力することを実験的に証明した。また，VIPニューロンのVIP産生に光刺激は抑制的に，5HTは促進的に働くことも明らかにし，VIP及びそのmRNAは光刺激の影響下に暗期に高く，明期に低い日内変動を



第96回 日本解剖学会総会を開催  
平成3年4月2～4日 於 京都会館

示すことを明らかにした。視交叉上核においてVIPニューロンはバソプレシンニューロンに直接シナプス形成を行い、他領域からの情報をシナプス入力により受け取り、その情報を統合した後、バソプレシンニューロンへ情報を伝える概日リズム同調機構に大きく関与していることを明らかにした。最近では視交叉上核におけるニューロンとグリアの相関、電極上に視交叉上核を培養し、培養ニューロンのリズムを自動的に記録する研究も進めている。このように生物時計のセンターとしての視交叉上核についての多くの業績を挙げてきたが、1995年（平成6年）

京都における第4回国際脳科学会議（IBRO）のサテライトシンポジウム“視交叉上核内の生物時計”を主催し、国内外の著名な研究者が参加した。また、1996、1997年度（平成8年、9年度）文部省科学研究費補助金基盤研究（A）（1）“光による生体内情報リズムの制御機構”の班長をつとめた。現在、視床下部におけるバソプレシンニューロンとCRFニューロンの浸透圧負荷やストレス負荷における相互関連についての研究も行っている。なお、岡村助教授は神戸大学へ教授として転出後、分子生物学的手法を取り入れ生物時計発現遺伝子の探索を行い活躍している。

藤澤肇助教授（その後1990年（平成2年）名古屋大学理学部教授に転出）らの研究グループについては藤澤助教授が神経発生学を専門とし、当初網膜の発生及び微細構造について透過型及び走査型電子顕微鏡により解析した。その後、網膜の標的器官である視蓋についてtracerを用い追跡し、投射経路について網膜と視蓋の対応性を明らかにし、藤澤助教授はアメリカ合衆国ユタ大学、西ドイツ共和国マックスプランク研究所に留学、帰国後、分子生物学の分野に進出、高木助手らと共に網膜一視蓋投射を規整する視神経投射のターゲットとなる蛋白について特定の物質を発見し免疫細胞化学的に同定すると共に分子生物学を利用し、その蛋白のクローニングに成功した。名古屋大学理学部に転出後、さらに研究を進展させ、文部省科学研究費補助金重点研究の班長をつとめ神経発生学の代表的研究者として活躍している。

栗林敏郎講師は大学院生、助手時代より心臓の発生について一貫して研究を行い、アメリカ合衆国NIHに留学、ヒト特発性心筋症の剖検資料を詳細に検索すると共に、WKYラットの心臓において動脈管形成異常による心筋線維の走行異常を発見し、ヒト特発性心筋症の発生機序の一つではないかと言う提唱を行い、海外の専門誌に多くの論文を発表した。

井端教授就任後、教室より1977年から1996年の間に著書64編、総説66編、原著338編（海外専門誌182編、国内英文誌63編）が発表されている。

（文責 井端泰彦）

1975年（昭和50年）	3月	山田博教授停年退職
1975年（昭和50年）	7月	第一解剖学教室助教授井端泰彦教授就任
1975年（昭和50年）	7月	講師安田峯生助教授昇任
1975年（昭和50年）	9月	助教授安田峯生愛知県心身障害者コロニー周生期学部部門部長に転出のため退職
1976年（昭和51年）	7月	講師藤沢肇助教授昇任
1980年（昭和55年）	3月	講師渡辺憲二福井医科大学助教授に転出のため退職
1985年（昭和60年）	4月	教授井端泰彦が学生部長に任命
1989年（平成元年）	3月	教授井端泰彦が学生部長任期満了（2期）のため辞任
1989年（平成元年）	3月	助教授藤沢肇名古屋大学理学部教授に転出のため退職
1990年（平成2年）	4月	講師岡村均助教授昇任
1993年（平成5年）	3月	講師栗林敏郎京都第二赤十字病院に転出のため退職
1995年（平成7年）	5月	助教授岡村均神戸大学医学部教授に転出のため退職

## 第一生理学教室

変遷 (1973~1997)

府立医大百年史には、1970 (昭45) 年に大阪大学医学部より亘弘教授が着任し、酵素反応機構やヘム蛋白の分子生理学的研究を行っていた時点までの記載がある。亘は教育・研究へのコンピュータ導入も熱心に推進したが、ヘム蛋白研究とコンピュータ導入には、蛋白質の立体構造解析を専門とする磯貝芳徳 (現・日本福祉大教授) の協力があつた。

1973 (昭48) 年以降の目覚ましい成果として、核磁気共鳴吸収 (NMR) 装置の医学分野への導入が挙げられる。今日では一般化した NMR であるが、当時は医学への応用を試みる者は極めて少なく、一教室で NMR を導入することは世界的にも突出した試みであつた。装置が稼動するや、 $^{31}\text{P}$ -NMR 法を用いて西川弘恭 (現・明治鍼灸大教授)、吉崎和男 (現・徳島大教授) らにより筋細胞における pH 測定や ATP 産生機構の研究が行われた。山田誠二 (現・松下産業衛生科学センター) は、gastrin 研究に  $^{13}\text{C}$ -NMR 法を応用した。また、西川は電子スピン共鳴 (ESR) の応用にも熱心に取組んだ。亘は1977 (昭52) 年に生理学研究所へ転出したが、これら分子生理学的研究は西川、吉崎、瀬尾芳輝 (現・講師) らによって引き継がれたのみならず、臨床教室との豊かな共同研究に発展して、中研 NMR 室・ESR 室の礎となった。

1974 (昭49) 年には、吉村寿人名誉教授以来の唾液腺分泌研究で業績をあげていた助教授今井雄介が大阪医大教授に転出した。



1990年 (平成2年) 当時の教室員  
(基礎1号館、旧鴨川病舎を背景に)

1978（昭53）年4月、亘の後任に森本武利が任せられた。森本は本学卒業後一貫して環境生理学・体液生理学の道を行ってきたが、かねてより循環血液量の重要性に着目しており、田中義文（現・麻酔学教授）と共にイヌの循環血液量・ヘマトクリット値の連続測定に成功すると、さっそく体液研究への応用を開始した。まず森本と田中が脱血時における間質から血管内への水分移動過程を解析し、次いで三木健寿（現・奈良女子大教授）は血漿膠質浸透圧の連続測定にも成功し、間質への蛋白移動と高体温時の循環虚脱の研究を行った。さらに能勢博（現・信州大教授）が低体温時の水分移動研究に用いた。

これらの循環血液量研究が独創的なのは、体液コンパートメントの力学的特性を解析しえた点にある。血液の大半が貯留する静脈系では、弾性以外に粘性を無視できない。磯貝による力学モデル化と一連の実験結果とから、概念的に delayed compliance と呼ばれてきた粘性項が静脈系と間質について初めて定量化されたのである。その後、この分野には夏山卓・重見研司・智原栄一・木下隆ら麻酔科大学院生も寄与した。

循環血液量連続測定システムは、次のような発展を遂げた。ひとつは細胞外液研究への発展で、伊藤俊之（現・助教授）はイヌにおいて細胞外液量の連続測定に成功し、これを細胞内外の水分移動研究に応用した。第二は電極を用いた血中電解質連続測定装置を組込むものである。能勢は矢和多多姫子（現・佐保女子短大教授）、杉本英造（現・神経内科）らと共に血中 Na 濃度連続測定法を確立しラット飲水行動の解析に応用して、いわゆる「自発的脱水」現象とは体液浸透圧調節が体液量調節に優先する結果であることを解明した。この現象を示さないイヌでは、中心静脈圧が飲水行動停止に関与することが伊藤らによって解明された。この後、血中 K 濃度の連続測定法は奥野直（現・神戸女子短大）と広瀬宗孝（現・麻酔科）により確立された。この分野では、他に森田雅弘（現・開業）、相馬彰（現・甲南病院長）、仲井幹雄（現・和知病院長）、猪田浩史（現・会社経営）らの多彩な寄与があった。

当教室の特色は、分子から個体にいたる多様な研究が有機的になされていることである。個体レベルの研究のひとつにヒト暑熱運動時の水分塩分補給効果の研究が挙げられる。この補給効果はまず人工気候室内で実験的に実証され、続いて中井誠一（現・京都女子大教授）、寄本明（現・滋賀県立大）らのフィールドワークでも実証されて、日本体育協会の行うスポーツ中の熱中症死予防活動に貢献している。第二は高齢者の体力研究である。木村みさか（現・医療短大部教授）らが取組んできたこのフィールド研究は、高齢化社会を迎えて一層注目を集めている。この他の個体レベル研究では、平川和文（現・神戸大教授）による身体特性とエネルギー代謝の研究、松原周信（現・京都府大）による心拍数の長期記録研究、松本勅（現・明治鍼灸大教授）の鍼灸研究がユニークである。

現在のスタッフは森本（教授）、伊藤（助教授）、瀬尾（講師）、鷹股亮・永島計・八重樫和宏（助手）、高橋みよ子（専門員）である。鷹股は浸透圧調節系と体温・循環調節系の競合を研究

しており、八重樫は蛍光計測を応用した循環研究を試みている。Yale 大留学中の永島は運動生理学研究に取り組んでいる。高橋は吉村名誉教授以来の教室事務を支えてきた。

1973年（昭和48年）	4月	教授（第一生理学）亘弘が学生部長に。
1974年（昭和49年）	3月	助教授今井雄介（本学昭和34年卒業）が大阪医科大学教授（生理学）に転出。
1977年（昭和52年）	12月	教授（第一生理学）亘弘が生物科学総合研究機構・生理学研究所教授に転出。
1978年（昭和53年）	4月	助教授森本武利（本学昭和36年卒業）が教授（第一生理学）に任ぜられた。
1981年（昭和56年）	4月	教授（第一生理学）森本武利が学生部長に。
1988年（昭和63年）	9月	助教授西川弘恭（本学昭和45年卒業）が明治鍼灸大学教授（生理学）に転出のため退職。
1990年（平成2年）	11月	名誉教授吉村寿人（83歳）が死去した。
1993年（平成5年）	9月	助教授吉崎和男（本学昭和47年卒業）が徳島大学教授（生理学）に転出のため退職。
1995年（平成7年）	8月	助教授能勢博（本学昭和54年卒業）が信州大学教授（加齢適応研究センター）に転出のため退職。
1996年（平成8年）	9月	基礎二号館三階より新築の基礎医学舎六階へ移転。

## 第二生理学教室

第一代の勝義孝教授の後を受けて第二代の岩瀬善彦教授が昭和33年に北海道大学から本学に着任し、脳波および微小電極による大脳、嗅球などの誘発電位の研究などを行った。昭和42～52年には大学紛争とその後遺症に悩まされながらも、内田助教授、北里、藤井、村山、鈴木助手と共に下記のテーマについて研究が行われた。1) 視覚野、上丘などの誘発反応のニューロンレベルの解析（岩瀬、内田ら）、2) 梨状葉脳切片の電気生理学的解析と温度効果（藤井）、3) 興奮性膜のイオン機構（北里、村山）、4) ラット自発行動の解析（鈴木）、さらに昭和52年(1977)の北里講師、村山助手の滋賀医大への転出を契機として、下記のテーマに関する人体応用生理学的研究が行われた。5) 視標追跡と量心動揺（岩瀬、内田、鈴木ら）、6) 意識レベルの現象と電気眼球図の関係（竹上）、7) カエル神経系の低温馴化の電気生理学的研究（小山、高梨）、8) 嗅脳切片標本の電気活動に対する温度効果、9) 随意前傾時の筋電図活動の解析（岩瀬、内田、橋本、鈴木、竹上、高梨）。

これらの研究成果は約30編の原著論文や日本生理学会、脳波筋電図学会などの外に国内外のシンポジウム、学会で発表された。その主なものとしては昭和54年：第6回国際筋電図学会（ストックホルム）、第5回国際姿勢学会（アムステルダム）、姿勢のシンポジウム（パリ）、昭和55年：第28回国際生理学会（ブタペスト）、昭和57年：第4回運動制御のシンポジウム



(パルナ, ブルガリア), 第10回国際脳波学会(京都), 第6回国際姿勢学会(京都)などがあがる。また岩瀬教授が, 名誉教授就任後の平成3年11月に勲三等旭日中綬章を受章され, 第2生理学教室関係者を集め祝賀会が催された。

昭和56年には岩瀬善彦教授の退官の後を受けて, 第三代の外山敬介教授が東京大学から着任し, 視覚野の神経回路と情報処理, 視覚野の可塑性, 神経回路発達, 情報処理の研究が開始された。当初研究は内田助教授(常盤短期大学教授に転出), 藤井講師(京都市保健衛生研究所に転出), 鈴木助手(同志社大学助教授を経て教授に転出)などと共に研究が行われたが, 1年後には名古屋大学から小松由紀夫助手(講師, 助教授を経て名古屋大学環境医学研究所教授に転出), さらにその後山本亘彦助手(講師を経て大阪大学助教授に転出), 黒谷亨助手(後に講師), 飼原壽夫(退職), 赤瀬英介, 東秀二, 井之川仁助手などが加わり, 活発に研究が行われた。その成果は Science を始めとする50編余の国際誌に原著として発表され, 北米神経科学会, 国際脳研究連合(IBRO), アジアオセアニア神経科学会(FAONS)などの数多くの国際あるいは国内のシンポジウムの特別講演, 招待講演などとして発表されている。

これらの研究成果の中には, 1) ネコの大脳皮質視覚野の学習過程を *in vitro* 標本でとらえた研究(小松, 外山), 2) ネコの高次視覚野(クレアビショップ野)の3次元運動刺激に対する反応性を調べた研究(外山, 北大路, 梅谷, 飼原), 3) 先天性の斜視ネコ(シャムネコ)で3次元運動視が保存されていることを示した研究(外山, 北大路, 梅谷), 4) 斜視患者でも同様に3次元運動視が保存されていることを示した研究(北大路, 外山), 5) 発達期のラット視覚野直下の白質に外側膝状体を移植すると正しい神経回路が形成されることを示した研究(浜崎, 小松, 山本, 中島), 6) 発達期のネコの視覚野の学習の可塑的变化がT型CaチャンネルによるCaの細胞流入により起動されることを示した研究(小松, 外山), 7) ネコの高次視覚野(21野)の反応性の研究(外山, 溝部, 赤瀬, 飼原), 8) ラットの外側膝状体-視覚野共培養標本で大脳皮質の層特異的神経結合が形成されることを示した研究(山本, 黒谷, 外山), 9) ラット視覚野の層特異的神経結合形成の分子機構の研究(山本, 東, 外山)などがある。

また, 外山教授は昭和62年より平成3年にかけて, 国立生理学研究所の客員教授を勤め, 当研究所の谷藤学助手と視覚野神経活動の光学的記録の研究を行い, 視覚野の神経回路が relaxation dynamics の計算機能を備えていることを示した。昭和61年には米国ワシントン州立大学の Fetz 教授との日米共同研究, 平成3年にはフランス, モンペリエの CNRS の Sladeczek 研究員との日仏共同研究, 平成4~5年には学術振興会招聘による米国カリフォルニア大学バークレー校の Crair 研究員との共同研究, 平成3~5年に HFSP 共同研究グラントによる英国オックスフォード大の Blakemore 教授, Molnar 研究員との共同研究が実施された。

これらの研究成果により外山教授は昭和57年には三菱財団研究助成賞, 平成4年には上原財団研究助成賞を受け, 平成3~5年にヒューマンフロンティアプログラム(HFSP)の国際共同

研究グラントをえている。また、平成2～4年にはHFSP Fellowship Grant 審査委員、平成4～9年にはIBRO中央執行委員、平成5～7年には文部省重点研究班の総括班長、平成5～9年には文部省学術審議会専門委員、平成7～8年には、文部省ライフサイエンス部会脳研究小委員会委員、平成9年にはHFSP科学者会議委員、科学技術会議ライフサイエンス部会脳科学委員会委員を勤めるなどの学会活動、研究行政にも貢献した。

## 生化学教室

本学百年史によれば昭和47年の時点で教職員は11名であり、その内平成9年現在も教室に残留する者は2名である。現在教室の構成員は教授西野輔翼、講師西村洋および若林保良、講師(学内)野坂和人、助手徳田春邦および里見佳子、大学院生圓城文雄およびト萍、研究生松本浩彦、増田光治、小野塚真理および山口紫野、研修員西野敦子、村越倫明、高安淳子および杉本肇の計16名であり、教室所属ではないが小児科学教室、第二外科学教室、第一内科学教室所属の大学院生として小坂喜太郎、鶴田淳、一石英一郎の3名が当教室の研究に参加し、総計19名である。

この25年間の研究の推移を見てみると、かねてよりの伝統を守るだけでなく、時代を反映した創意の芽が徐々に加えられた。昭和53年に当時教授の能勢善嗣が福井医科大学副学長就任の為退職、続いて講師の岩島昭夫(現京都府保健環境研究所所長)が教授に就任すると、まず故藤田秋治名誉教授以来の教室の伝統であるビタミンB1を主軸とした研究に焦点が絞られた。なかでも岩島は真核細胞におけるビタミンB1の膜輸送の機構解明に着眼し、これに西村、野坂、研究生の川崎祐子らが加わる形で酵母の輸送変異株などを用いた動力学的な基礎データを渉猟した。特に昭和60年以降、研究の対象は遺伝解析的手法の容易な出芽酵母にしぼられ、一連のビタミンB1膜輸送機構の研究に対して、昭和63年岩島に日本ビタミン学会賞が授与された。この頃より研究は分子生物学的手法を中心としたものになったが、B1を補酵素型に変換する酵素として重要なチアミノピロホスホキナーゼやB1生合成の最終部分の酵素であるチアミンーリン酸ピロホスホリラーゼの酵母の遺伝子の単離同定に成功した野坂は、平成8年ビタミン学会奨励賞を受賞した。さらに岩島以来の目標であったビタミンB1膜透過タンパクの酵母遺伝子も平成8年に西村らの困難なクローニングの努力が報いられ単離同定された。西村はさらに酵母のビタミンB1代謝酵素遺伝子群がB1の補酵素型であるチアミノピロリン酸により協調的に抑制を受けると考え、その分子機構の解明に取り組んでいる。

故前助教授上田潔(滋賀医科大学生化学第2講座名誉教授)、前講師松浦尚雄(現京都府赤十字血液センター副所長)、大学院生上山久雄(現滋賀医科大学生化学第2講座助教授)らは細胞

核に関する研究を展開し、特に核膜や核マトリックスを構成するタンパクの構造と機能の解明で独創的な業績をあげた。この研究は上田の転出に伴い滋賀医科大学で継続されることになった。

前講師山田良平(現長岡技術科学大学工学部生物系教授)、故前助手辻孝彦、大学院生古川美子、研究生崎寿栄らはビタミンB6とD-アミノ酸を中心とした酵素の反応機構を研究し、大腸菌のピロドキサルキナーゼとマウスのアスパラギン酸アミノ基転移酵素の基質や基質類似体による新しい阻害機構を明らかにしたほか、動物のD-アスパラギン酸酸化酵素の活性変動を種々の条件下で観察し、従来動物では顧みられることのなかったD-アミノ酸の生理機能の解明を試みた。この研究は山田の転出に伴い現在長岡技術科学大学で継続されている。

西野・徳田・里見らの研究グループは、がんのコントロールを目標とした新しい研究分野の開拓を行っている。この研究の流れは西野が米国留学中に、がん化に伴って変化する細胞膜の輸送機能の研究に携わったことに始まり、昭和53年に帰国後さらに研究分野を拡大していった。特に徳田が加わってからがんの化学予防に関する研究が飛躍的に進み、一酸化窒素(NO)が発がんのイニシエーターおよびプロモーターとなりうることを世界で初めて動物実験で証明することに成功するなど、発がんの要因を見出すための研究においても常に新しい研究成果をあげている。平成5年に西野は国立がんセンター研究所がん予防研究部部長として転出したが、平成7年に帰任し、がん予防に重点を置いて研究を続け現在に至っている。特に独創的な発想を重視しており、バイオ・ケモプリベンションという新しい概念を提案した。この概念に立脚した研究は里見(現在米国留学中)を中心に進められている。一方真核細胞の染色体末端構造テロメアが正常細胞では細胞分裂に伴い短縮するが、不死化細胞ではテロメアーゼ活性が高く短縮されないことが観察され、発がんとの関連が推測されている。平成9年野坂はヌクレオシド二リン酸キナーゼとヒトのテロメア系との関連を認め、その詳細解明を目指し研究を続けている。

若林は米国留学中にアルギニン、プロリンがグルタミン酸から合成される際の最初の酵素ピロリン-5-カルボン酸合成酵素の存在をラットを用いて示した。帰国後麻酔学教室大学院生千布悦子らと共に本酵素の分布検索を広範に行い、活性が小腸に限られることを認めた。そこで小腸の大部分を切除したラットをアルギニン欠乏食やオルニチンでアルギニンを代替させた実験食で飼育すると体重減少と負の窒素平衡が認められるが、アルギニンやシトルリンを加えておくと体重増加と正の窒素平衡が認められた。よって非必須アミノ酸アルギニンの合成に小腸は必須の臓器であり、大量に欠損するとその動物にとりアルギニンは必須アミノ酸になることが示された。栄養学的にいう非必須アミノ酸という概念は個体に適応する概念であり組織や細胞のレベルでは当てはまらないことが結論された。

以上この25年の主要な成果を概括したが、故藤田秋治名誉教授以来脈々と流れ続く研究があ

る一方で、いくつかの研究が新たに加わり、またいくつかは、やむなく中止に至った。今日の研究活動はテーマにおいても方法論においても日々変化と対応を迫られることは明白である。願わくは我々の教室の方向性が、今後とも医学部生化学教室のあり方としてよりよき結果をもたらすことを心より祈念する次第である。

1978年（昭和53年）	9月	教授の能勢善嗣が退職
1978年（昭和53年）	10月	生化学教室前教授能勢善嗣が福井医科大学副学長に就任
1978年（昭和53年）	11月	講師の岩島昭夫が教授に昇任
1979年（昭和54年）	4月	助教授の上田潔が滋賀医科大学生化学第2講座教授に就任 同時に講師松浦尚雄は同講師
1980年（昭和55年）	6月	助手の西野輔翼が助教授に昇任 助手の山田良平が講師に昇任
1983年（昭和58年）	6月	名誉教授能勢善嗣が福井医科大学学長に就任
1988年（昭和63年）	5月	名誉教授能勢善嗣が勲二等旭日重光章を受章
1989年（平成1年）	9月	講師の山田良平が長岡技術科学大学工学部生物系教授に就任
1990年（平成2年）	4月	助手の西村洋が講師に昇任
1993年（平成5年）	4月	助手の若林保良が講師に昇任
1993年（平成5年）	10月	助教授の西野輔翼が国立がんセンターがん予防研究部部長に就任
1995年（平成7年）	3月	教授の岩島昭夫が定年退職
1995年（平成7年）	10月	国立がんセンター研究所がん予防研究部部長の西野輔翼が生化学教室教授に就任
1996年（平成8年）	11月	平成11年度完成予定の新基礎学舎への移転に先立ち工事期間中一時的に旧基礎2号館2階から旧看護専門学校校舎へ移転する。1階を教室や教員室とし、2階3階を実験室とした。

## 第一病理学教室

1974年3月に三宅教授は定年制により教授職より退職した。同年4月助教授米沢猛が後任として教授に選任された。米沢は組織培養におけるミエリン形成の研究を発展させ、特に脱髄性疾患のメカニズム解明をめざして精力的に研究を進めた。1976年3月講師田中順一が助教授に昇任した。米沢は在職中、International Symposium on the Aetiology and Pathogenesis of the Demyelinating Diseases (Kyoto, 1973. 9. 3), 第19回日本神経病理学会学術研究会(京都, 1978. 5. 27), International Symposium on the Leukodystrophy and Allied Diseases (Kyoto, 1981. 9. 19)などの学会会長を歴任した。1981年助教授田中順一は鳥取大学脳研神経病理に助教授として転出した。

1982年3月米沢教授は定年制により退官し、その後任として同年5月滋賀医科大学病理学助教授芦原司が教授として着任した。芦原は第二病理学教室(藤田哲也教授)のもとから滋賀医

科大学助教授として赴任し、腫瘍の増殖動態に関する研究を進めていた。そのため教室の研究の中心は神経病理学から腫瘍病理学へと大きく方向転換した。芦原とその共同研究者達は特にDNA, DNA-RNA 顕微蛍光測光法を人体組織に応用して消化器腫瘍(蒲地, 諸富ら), 肝腫瘍(香川ら), 骨・軟部腫瘍(楠崎, 竹下ら), 甲状腺腫瘍(村田ら), 加齢(藤本ら)の解析を行い、良性腫瘍と悪性腫瘍の増殖動態の相違, 癌の進展に伴う増殖動態の変化, 加齢に伴う核DNAの多倍体化を明らかにしていった。講師の土橋康成は1983年8月助教授に任ぜられ、消化器癌の母地病変としての慢性胃炎の研究を地理病理学的な視点も含んで行っていった。その後芦原らは画像解析法を駆使して腫瘍細胞核の形態解析を進め一定の成果を上げていった。

教授芦原は着任後現在に至るまで、第16回基礎老化学会(副会長, 会長 藤田哲也, 京都), 第30回日本組織細胞化学会総会(副会長, 会長 藤田哲也, 京都, 1989.10.23), 第42回日本細胞生物学会大会(副会長, 大会長 藤田哲也, 京都, 1989.10.25), 第83回日本病理学会総会(副会長, 会長 藤田哲也, 京都, 1994.3.29), 10th International Congress of Histochemistry and Cytochemistry(プログラム委員長, 会長 藤田哲也名誉教授, Kyoto, 1996.8.18), 第37回日本組織細胞化学会総会(会長, 副会長 高松哲郎教授, 河田光博教授, 京都, 1996.8.18), The 3rd International Conference on the Medical Aspects of Telemedicine(プログラム委員長, Kobe, 1997.5.30)の学会を主催した。

島田信夫教授(臨床検査部・病理)の定年退職後、臨床各科の深い理解と支援を得て本学附属病院に病院病理部が1990年4月に創設され、その初代部長として助教授土橋康成が転出(兼務)した。病院病理部は3人のスタッフ(助教授, 講師, 助手)に第一・第二病理学教室および老化研の教室員が全面的に協力し現在に至っている。

一方、教授芦原は病理学会では病理科標榜委員会の主力メンバーとして病理学の臨床科としての社会的な認知と病理科標榜を目指して尽力した。現在、病理科の標榜は未だに実現していないが、標榜委員会の努力の結果、医療における基本的領域診療科として病理学が社会的に認知されたことは日本の病理学の発展にとって極めて重要な意味を持っている。

近年、教授芦原は世界的なコンピュータ・ネットワーキングの潮流の中での医療知識の共有化の視点のもとに、遠隔医療における高精細医療画像転送の実用化をNTTなどとの共同研究を進めており、1997年には本学附属病院と府立与謝の海病院の間の遠隔医療の実験を開始した。

1996年8月には基礎医学舎が新築され教室・病理解剖室・標本室が新基礎医学舎に移転した。

1974年(昭和49年)	3月	教授三宅清雄が定年退職。
1974年(昭和49年)	4月	助教授米沢猛が教授に昇任。
1976年(昭和51年)	1月	講師田中順一が助教授に昇任。
1981年(昭和56年)	3月	助教授田中順一(現東京慈恵会医科大学神経科学研究部教授)が鳥取大学脳研神経病理助教授に転出のため退職。

1982年（昭和57年）	3月	教授米沢猛が定年退職。
1982年（昭和57年）	5月	滋賀医科大学助教授芦原司が教授に就任。
1982年（昭和57年）	9月	講師有蘭直樹（現京都府立医科大学医動物学教室教授）が滋賀医科大学転出のため退職。
1983年（昭和58年）	8月	講師土橋康成が助教授に昇任。
1984年（昭和59年）	6月	助手岡部英俊（現滋賀医科大学臨床検査部教授）が滋賀医科大学転出のため退職。
1990年（平成2年）	4月	助教授土橋康成が本学附属病院の病院病理部の創設に伴って病院病理部部長（兼任）に任ぜられる。
1996年（平成8年）	8月	基礎医学舎の新築に伴い、教室・解剖室・標本室が旧基礎一号館から新基礎医学舎に移転。

## 第二病理学教室

1973年（昭和48年）年当時、第二病理学教室は基礎1号館1階に剖検室と廊下を隔てて第1-5研究室（助講室、教員室及び実験室）、2階に学生実習室、3階に6研（教授室）、4階に第7、8研究室（実験室）が置かれていた。教室の構成は、藤田哲也教授、竹岡 成助教授、北村忠久講師、芦原 司助手、吉田 悟助手並びに大学院生の福田 優、服部隆則である。研究テーマとしては、1）中枢神経におけるニューロンとグリアの発生に関する研究、2）ヒト癌の発生とプログレッションに関する研究など「細胞動態」が中心テーマであり、このためオートラジオグラフィや顕微測光法に関する論文も多い。

1973年以降教室へ就任した方及び主な出来事を以下に列記する。7月藤田教授研究部長を兼任（1975年7月まで）。10月福田助手就任。1974年（昭和49年）4月服部助手就任。1975年（昭和50年）3月竹岡助教授・芦原助手新設の滋賀医科大学第1病理学教室教授・助教授として赴任のため退職。4月中西助手就任。1976年（昭和51年）4月土橋助手就任。1978年（昭和53年）1月建部助手就任。1979年（昭和54年）1月藤田教授「中枢神経系細胞発生の研究」にて昭和53年度朝日賞受賞。1980年（昭和55年）3月福田講師新設の福井医科大学第1病理学教室教授として赴任のため退職。4月細川助手就任。1981年（昭和56年）4月藤田教授第70回日本病理学会総会（東京）にて宿題報告。演題は「細胞動態からみた胃癌の発生と進展」。同月伏木助手就任。5月第14回日本発生生物学会を主催（京都会館）。1982年（昭和57年）10月高松助手就任。1984年（昭和59年）4月濱田助手就任。6月第8回日本基礎老化学会を主催（京都会館）。1988年（昭和63年）3月北村助教授塩野義製薬医薬研究開発本部副本部長に就任のため退職。4月藤田教授京都府立医科大学学長就任（平成6年3月まで2期）。1989年（平成元年）10月第30回日本組織細胞化学会・第42回日本細胞生物学会の合同大会を主催（京都国際会館）。4月南川助手就任。1990年（平成2年）藤田教授 第10回島津賞（顕微蛍光測光法と共焦点レーザー顕微鏡の開

発・応用に関する研究)を受賞。1991(平成3年)4月桂助手就任。9月真寄助手就任。1992年(平成4年)4月に第9回レーザー顕微鏡研究会(京都府立医科大学)を、8月には第18回日本組織細胞化学講習会(京都国際会館)を主催。1994年(平成6年)3月第83回日本病理学会を主催(京都国際会館)。1995年(平成7年)3月藤田教授退職、4月後任として高松教授就任。7月横山助手就任。1996年(平成7年)5月に第14回レーザー顕微鏡研究会(京都府立医科大学)を主催。8月藤田名誉教授が会長として第10回国際組織細胞化学会議(京都国際会館)を開催。7月から12月にかけて1期工事が完成した新基礎学舎へ病理解剖室、教室、病理標本室、学生組織実習室の順に引っ越し。1997年(平成9年)4月小山田正人講師就任。

1997年9月1日現在教室の構成は、高松哲郎教授、小山田正人講師、真寄武学内講師、木谷(桂)奏学内講師、横山慶一助手であり、新基礎学舎の3階に仮教室が置かれている。教室のテーマは、細胞間コミュニケーション特にギャップ結合の構造と機能であり、不整脈の発生病理や傷害に対するグリアの反応について固定組織だけでなく生きた組織や細胞も対象として分子細胞生物学的手法や自ら開発してきたレーザー顕微鏡システムを用いた研究を行っている。



藤田哲也教授朝日賞受賞祝賀会記念

## 医動物学教室

医動物学教室の開設に関しては、昭和23年（1948）10月1日、小林晴治郎理学博士の講師嘱託の発令があり、10月21日に最初の医動物学の講義が行われ、同年12月31日付けで教授待遇講師の発令がなされている。そこでこの内もっとも早い昭和23年10月1日を以て医動物学教室創設の日と定める。以来、1972年（昭47）までの歴史は「京都府立医科大学百年史」に記載されている。本学がここに創立125周年を迎えるに当たり、「百年史」以後の医動物学教室の歴史を記載することにする。

1972年（昭47）11月3日、百周年記念式典が本学記念講堂で華々しく開催された頃、教授吉田幸雄は学生部長として大学紛争の余韻さめやらぬ中を学長中村恒男を助け記念行事の遂行に努力した。当時、燎原の火のごとく全国に広がった学生運動は本学にも波及し、1969年（昭44）初頭より大衆団交、学内封鎖、記念講堂事件、機動隊導入、大学の閉鎖と嵐のごとく経過し、ようやく沈静化に向かった時期であった。

### <教室人事>

医動物学教室における、この25年の人事異動の概要をみると、1973年（昭48）当時、教授吉田幸雄、助教授松尾喜久男、講師岡本憲司、助手松野喜六、近藤力王至、有菌直樹であったが、以後、以下のごとく異動があった。1974年（昭49）6月松野助手・同年8月岡本講師退職、同年10月近藤助手講師昇任・上本麒一・尾野佳子助手採用、1975年（昭50）3月近藤講師金沢大学助教教授転任、1976年（昭51）4月上本助手滋賀医大助教授転任・尾野助手退職・山田 稔・沢田佳子助手採用、同年7月猪飼剛助手採用、1977年（昭52）5月有菌助手1病理転任、1978年（昭53）7月沢田助手退職・中村圭子助手採用、1979年（昭54）7月塩田恒三助手採用、1980年（昭55）5月猪飼助手・中村助手退職・郷原さゆり助手採用、1981年（昭56）4月松尾助教授名古屋保健衛生大学教授転任、同年5月郷原助手退職・村部圭子助手採用、1982年（昭57）5月村部助手退職・石黒太朱世助手採用、1983年（昭58）4月塩田助手講師昇任、1984年（昭59）7月山田助手講師昇任・松本芳嗣助手採用、1986年（昭61）4月塩田講師助教授昇任・吉川尚男助手採用、1987年（昭62）4月石黒助手退職・松田信治助手採用、1989年（平1）4月吉田幸雄停年退職・京都府衛生公害研究所長就任・有菌直樹教授就任、同年11月吉川助手奈良女子大学助教授転任、1991年（平3）4月松本助手東京大学助教授転任、1992年（平4）4月内川隆一助手採用、1993年（平5）4月手越達也助手採用である。

### <学位授与>

この期間に学位を授与された者は、栗本浩、岩城操、有菌直樹、織田清、荻野賢二、嶋田義治、猪飼剛、竹内滋、塩田恒三、松本芳嗣、吉川尚男、山田稔、岡林加枝、手越達也、吉川哲



也、白坂誠一、松田信治、織田正、鎌田功、中澤素邦、岡田学の21名である。

#### <大学関係役職>

吉田幸雄：1971年（昭46）7月～1973年（昭48）3月学生部長，1981年（昭56）7月～1985年（昭60）7月図書館長，1994年（平6）5月～現在学友会会長。

有菌直樹：1995年（平7）4月～1997年（平9）3月学生部長。

#### <学会関係役職・学会開催・学会賞>

長花操：1976年（昭51）11月第32回日本寄生虫学会・第31回日本衛生動物学会西日本支部大会会長，1983年（昭58）4月第31回桂田賞受賞（肝吸虫の疫学的研究）。

吉田幸雄：1973年（昭48）10月第29回日本寄生虫学会西日本支部大会会長，1975年（昭50）日本寄生虫学会会長，1982年（昭57）4月～1988年（昭63）4月日本寄生虫学会西日本支部長，1989年（平1）4月第37回桂田賞受賞（ニューモシスチス・カリニの研究），1991年（平3）11月第33回日本熱帯医学会会長。

松尾喜久男：1975年（昭50）4月日本衛生動物学会会長。

佐藤淳夫：1981年（昭56）4月第50回日本寄生虫学会・第33回日本衛生動物学会会長。

有菌直樹：1997年（平9）10月第53回日本寄生虫学会西日本支部大会・第52回日本衛生動物学会西日本支部大会会長。

#### <研究活動>

1973年（昭48）頃以降の研究テーマとしては，1）ニューモシスチス・カリニの研究，2）臨床寄生虫学，3）寄生虫免疫学に大別できる。

1）ニューモシスチス・カリニならびにこれによって起こる肺炎の研究は，1973年（昭48）本学小児科で伴性複合免疫不全に肺炎を合併した1男児の剖検肺からカリニを見いだしたのを端緒に，吉田らは本肺炎の今後の重要性に着目し，荻野大学院生，猪飼・有菌・塩田・山田助手を始め教職員挙げて研究を開始し，本学小児科，病理，内科・外科（腎移植）・放射線科をはじめ関連病院，および他大学とも連携して急速に研究を発展させていった。まず診断を確実にするための技術の確立（病原体染色法，喀痰集シスト法，嚢子純化法），ついで科学研究費により透過型電子顕微鏡が導入されるや，病原体の微細構造が大学院生竹内らにより，全生活史が松本らにより，また凍結切断法による各発育時期における細胞膜の構造変化と膜内蛋白粒子の研究が吉川らにより行われた。中でも松本らによる Synaptonemal complex の発見は本虫が有性生殖を行う生物であることを証明し，世界の注目を集めた。その後これがマラリアにも見いだされた。さらに塩田による診断技術の改良，とくに PCR 法による診断あるいは野鼠における流行状況，山田による核内 DNA 量の増減による生活史の研究，その他，松田，岡林，手越，陳，盛らを始め全員による各種実験動物への感染実験，治療薬剤の検定，発症予防法の研究などあらゆる領域において先進的研究を行った。その後エイズが地球上に発生し，このニューモ

シスチス・カリニ肺炎が最大の合併症と死因になることが明らかになるにつれますます注目を集めた。本研究関連の業績は著書2編，論文133編（内欧文論文39編），国内外の学会における発表は特別講演，シンポジウムを含め百数十回に及んでいる。

## 2) 臨床寄生虫学

最近のわが国における寄生虫症の傾向をみると回虫，鉤虫などの一般寄生虫は減少の一途をたどっているが，国際交流・グルメ嗜好・ペットブーム・性の自由化などにより診断し難い寄生虫症が臨床家を悩ませている。本教室ではこれら臨床に役立つ診断と治療の研究を行い，学内はもとより広く他大学・病院と共同研究を行った。その症例はニューモシスチス・カリニ肺炎，マラリア，赤痢アメーバ症，ランブル鞭毛虫症，トキソプラズマ症，クリプトスポリジウム症，プラストシスチス症，アニサキス症，広節裂頭条虫症，鞭虫症，肝蛭症，棘口吸虫症，日本住血吸虫症等など多岐にわたり，この25年間で合計930例に上る。

## 3) 寄生虫免疫学

平成元年に有菌が教授に就任してから後は，研究は次第に免疫学的なアプローチに力点が置かれるようになってきた。中でも蠕虫類におけるIgE抗体反応，マスト細胞反応が現在の主要な研究テーマである。松田，内川らは線虫感染ラットにおけるサイトカイン産生パターンを詳細に解析しており，線虫感染においてはTh2タイプのサイトカイン産生が生じることを明らかにし，さらに胸腺外発育T細胞の関与，CD8+T細胞のIgE抗体産生への関与についても研究を進展させつつある。山田，中澤，鎌田らは線虫抗原の解析をすすめ，線虫の分泌型アセチルコリン・エステラーゼ，システインプロテアーゼ等がIgE抗体反応のアレルゲンとなる可能性を示した。現在，線虫抗原がTh2タイプのサイトカイン産生を誘導する詳細な機序についてin vivo, in vitroでの研究が進行している。一方，手越らは線虫感染時のマスト細胞前駆細胞の動態と線虫排除の機序について研究を進めている。これらの研究は寄生虫撲滅に役立てることを最終目標として行われていることはもちろんであるが，一方で，寄生虫に対する免疫学的反応が寄生虫のみに特有の現象ではなく，現在増加しつつあるアレルギー疾患と共通のメカニズムに由来する部分が少なくないことから，より学際的な立場での研究の展開と貢献をめざしている。

## <国際貢献>

医動物学は人体寄生虫並びに寄生性，ウイルス性，リケッチア性，細菌性疾患を媒介する昆虫やダニの研究を行うものであり，熱帯医学と深く関わっており国際性を持っている。そのため多数の教室員が海外で研究を行い，かつ海外から留学生を受け入れた。

その一つは鉤虫（十二指腸虫）の研究で，吉田らが中心となってズビニ鉤虫，アメリカ鉤虫の感染経路と生活史の研究，セイロン鉤虫・ブラジル鉤虫・マレー鉤虫などについて新しい分類学的見地から世界的な分布調査を行い，鉤虫研究の拠点と目された。またニューモシスチス・



教室員（平成10年8月）

後列 手越達也、内川隆一、山田 稔、塩田恒三、兵 行彦  
 前列 有菌直樹、吉田幸雄、H. M. Seitz（松田信治不在）

カリニの研究はエイズの勃発とともに注目され、多くの教室員を海外に派遣して国際的研究を行うとともに中国から陳錫慰、盛長発、アメリカから Dr. Stahl などを受け入れて国際交流を深めた。一方、松尾助教授らは世界に流行するオンコセルカ症とそれを媒介するブユの研究を行うため上本助手、伊藤寿美代研修員らとともにそれぞれ1～3年宛グアテマラに滞在し、かつマリア・カルロッタ、レオネールの両留学生をそれぞれ1年間招いて研究指導を行った。

<終わりに>

医動物学教室は1948年（昭23）創設以来、1988年（平10）開講50周年を迎えた。発足当時、日本は敗戦の虚脱状態からようやく立ち上がり始めた頃で、人々は貧しく、ほとんどの日本人は寄生虫に感染し、乏しい栄養を奪われていた。政府は各大学に寄生虫学教室の設立と斯学の教育の充実を要望した。本学ではいち早くこれに呼応し、小林晴治郎を招聘して医動物学教室を開講した。医動物学という名称を用いた我が国最初の教室である。医動物学というのは単に人体内に寄生する寄生虫を研究するのみならず、体表に寄生したり、伝染病を媒介する昆虫やダニ、さらには有害な貝類、魚類、蛇類をはじめ医学に関係あるすべての動物を研究するという心意気であった。ところが日本の急速な経済発展に伴い、感染症は減少の一途をたどり、特に寄生虫に対する関心が薄れ、医学教育の場においても軽んぜられるようになってきた。これに伴って各研究者はどこの大学においても免疫学、分子生物学などへ研究を転換している。これはこれで学問研究発展のためまことに結構であるが、世界を見渡せば全人口の80%は未だ寄生虫汚染地区に住んでおり、今後の国際交流の進展を考えれば問題は解決済みというわけには

いかない。いつでも活用できる知的財産を保有・継承しておく必要があるのではないかと考える。本学創立150年史には医動物学教室はどのような年史を書くであろうか。

(文責 吉田幸雄, 塩田恒三)

## 微生物学教室

### 微生物学教室の25年

われわれの教室の出身者と現役教室員で構成するBH会は、毎年1回の会合、年2回の機関紙の発行、さらにテニス大会などのレクリエーションも随時おこなうといったたいへんアクティブな組織である。「BH」の名称は、微生物学がまだ細菌学 (Bacteriologie) であり、衛生学 (Hygiene) といっしょにひとつの教室であった時代からの伝統だそうである。このBH会の会合に出席して、毎年たいへん喜ばしいのが、菅沼 惇、岸田綱太郎両名誉教授のいまでもお元気なお姿を拝見し、お言葉を頂戴できることである。

微生物学教室の25年の最初の約10年間は、このお二人の名誉教授が築いてこられた歴史である。

菅沼先生は、本学微生物学教室第4代教授として、昭和41年から49年(1966~1974年)に当教室を主宰された。数々の御業績のなかでも最も主要なものは細菌の微細構造の電子顕微鏡的研究であり、ブドウ球菌をはじめとする多彩な細菌を対象とし、また抗生物質の作用なども絡めた幅広い視野からの研究をしておられた。

昭和50年(1975年)には、助教授であった岸田先生が第5代教授に就任された。抗ウイルス、抗がん作用を有する生体物質として当時一躍脚光を浴び始めたインターフェロンを御専門になされ、その研究での草分け的存在となられたことはあまりにも有名である。基礎的研究から動物疾患モデル実験、さらに臨床研究にまでおよぶ広範な業績を残された。

岸田先生は現在、ルイ・パストゥール医学研究センターの理事長としてご活躍されている。また一昨年(1995年)、モスクワにて、ロシア科学アカデミーより権威あるメチニコフ記念メダルを授与された。

さて、最近の約15年間は、現教授、今西二郎先生が当教室を主宰されている。昭和58年(1983年)に岸田先生の後継者として、助教授から第6代教授になられた。研究テーマとしてもインターフェロンの研究を継承されたが、それだけにとどまらず、広くサイトカイン全般を包括する研究にまで発展された。これには腫瘍変性因子(TDF)の研究も含まれる。また現在では、個体の発生過程における、サイトカインの生理的な発現とその機能の研究がおこなわれている(喜多講師)。

微生物学全体にわたる多彩な研究も行われてきた。とくにウイルス学の分野では、インフルエンザウイルス、ウシ白血病ウイルス、ヘルペスウイルス、さらに最近では HIV を対象とした研究がおこなわれてきた。このうち最近の研究に絞って紹介すると、ヘルペスウイルス感染における熱ショックたんぱく質の局在と機能の解析（小林助手）、そして HIV 感染時の CD4 陽性細胞のアポトーシス誘導機構の研究（市村助教授、飯田助手）が精力的に推進されている。

また、一見「微生物学」とは結び付きそうにないテーマも、時代を先取りする形で活発に行われてきた。たとえば神経芽腫、肺癌、骨肉腫などの腫瘍細胞の増殖／分化が、ストレス応答や癌遺伝子との関連で研究されてきた。また、熱ショックたんぱく質に関した一連の研究がある。技術的な面でも、PCR をいち早く取り入れたことが挙げられ、また、のちに老化研に移られた山口先生がやっておられた細胞の無たんぱく培養系の開発も特筆に値する。

一方で、遺伝子治療の基盤研究が現在行われている。これは先天性免疫不全症や悪性腫瘍の治療を目的としているが、さらに学内外の多くの基礎と臨床の研究室との共同研究として、より広い臓器／疾患を対象とした遺伝子治療の研究へと拡大している（松田講師、佐藤助手）。

微生物学教室の特色として、多くの教室との共同研究が活発に行われていることが挙げられよう。今西時代だけをとってみても、第1, 2, 3内科, 第1, 2外科, 整外, 小児, 眼科, 耳鼻科, 泌尿器科など（順不同）と継続的、あるいは断続的に共同研究がなされ、いずれも大きな成果をもたらしている。現在当教室の大学院生のうち3名は臨床出身であり、また臨床に籍をおき、当教室に研究にきている大学院生は10名以上にもものぼる。

また学外との共同研究も活発に行われており、スロバキア共和国ウイルス研究所の Fuchsberger 博士、ベルギー・ルーベン大学 Billian 教授、東京大学岩倉洋一郎教授、京都大学速水正憲教授、大東 肇教授を始め、多くの民間企業などが partner となってきた。

以上のように微生物学教室は、長い伝統を受け継ぎながらも常に変遷し、医学の進歩と本学の発展に寄与するためにたゆまぬ努力を重ねている。

なお学生の教育に関しては、微生物学教室は一貫して細菌学、ウイルス学、そして免疫学を、3, 4年生に教授してきた。これには講義と実習が含まれる。現在主として細菌学を今西教授と喜多講師が、ウイルス学を市村助教授が、そして免疫学を松田が担当している。

（文責 松田）

## 薬理学教室

### 所属の変遷

1971年（昭和46年）8月に栗山欣弥教授が就任して以来、本教室の研究のテーマは主に中枢

神経系における薬理学であった。特に抑制性の神経伝達物質とされる  $\gamma$ -アミノ酪酸 (GABA) およびタウリンのシナプス伝達に関わる神経化学的研究の分野においては、世界的レベルの研究を栗山教授が停年退官するまで続けていた。1973年(昭和48年)9月には国立京都国際会館において日米ジョイントセミナーを、また同11月には第44回日本薬理学会近畿部会を主催し、翌1974年(昭和49年)11月には府立芸術文化会館において第17回日本神経化学会を主催した。1970年代前半には、木村 宏(現滋賀医科大学・分子神経生物学研究センター教授)および米田幸雄(現摂南大学薬学部教授)を中心とした脳内 GABA およびタウリンの微細化学・生化学に関する研究で数多くの論文を世に送り出した。さらに三木直正(現大阪大学医学部教授)、吉川和明(現大阪大学蛋白質研究所教授)らによって神経系におけるニトロ化合物とグアニル酸シクラーゼに関する研究が行われ、これらの発見が、現在世界中で話題となっている一酸化窒素(NO)に関する研究の呼び水となったものと思われる。70年代後半にはいると GABA<sub>A</sub> 受容体の研究に進み、脳内 GABA<sub>A</sub> 受容体/ベンゾジアゼピン受容体/Cl<sup>-</sup>チャンネル複合体の生化学的・薬理的性質について、GABA<sub>A</sub> 受容体複合体の可溶化・精製を試み国内外に多くの実績を発表した。一方タウリンに関しても、中枢神経系における機能のみならず、内分泌、心臓機能あるいは肝臓との関連についても精力的に研究を行い、これが80年代において、世界に先駆けてタウリンの抗体を滋賀医科大学との共同研究により作成した成果につながっていったものである。このころ府立医科大学を卒業して大学院生として薬理学教室に入ってきたのが現在の矢部千尋教授であり、明暗順応化における網膜の神経活性アミノ酸の変化や糖尿病モデルにおける網膜内ドパミンの代謝変化についての研究を行い学位を取得した。この糖尿病モデルに関わったことが、現在の薬理学教室のテーマとなっていたものである。神経活性アミノ酸の研究と共に薬理学教室の研究の根幹をなしたのは薬物依存、特にアルコールの中枢作用に関する研究であった。アルコールの中枢作用に関しては、80年代から90年代にかけてストレスとアルコールや GABA<sub>A</sub> 受容体機能に及ぼすアルコールの影響などについて多くの業績を残した。1985年(昭和60年)10月には第20回日本アルコール医学会を、また1988年(昭和63年)6月には第4回国際アルコール医学生物会議を主催し、国内外の多くのアルコールに関する研究者との交流を深めた。1980年代後半から、本教室の主要な研究テーマの一つであった GABA の研究は、GABA 受容体のもう一つのサブタイプである代謝共軛型の GABA<sub>B</sub> 受容体の分子薬理学的研究へと進み、中安博司講師(現岡山大学助教授)を中心とした研究グループは、世界に先駆けてその純化精製と再構成実験に成功した。一方、大熊誠太郎(現川崎医科大学教授)による初代培養神経細胞を用いた中枢機能の解明が本教室のテーマに加わり、培養神経細胞を用いた受容体の機能や神経伝達物質遊離調節機構の解明が行われた。この年代の初代培養神経細胞を用いた研究では、 $\beta$ -受容体やムスカリン受容体の脱感作・過感作機構の解明や、神経細胞からの GABA およびアセチルコリンの遊離調節機構に関して多くの研究発表が行われた。1990年

代には、さらに近年話題になっている一酸化窒素 (NO) による神経伝達物質遊離促進の機序について、培養神経細胞を用いて多くの業績をあげた。またこの頃には、将来の老人人口の増加に伴い必要とされる老人性痴呆の改善薬に関する薬理学的研究について、橋本恒一講師を中心とする研究グループにより数多くの研究が行われ、臨床使用に至った薬物も出現した。また、内因性の脳内ベンゾジアゼピン様物質 (エンドセピン: DBI) の研究を開始し、この物質がアルコールを中心とする薬物依存の成立および禁断症状の発現に重要な意義を持つことを見出した。1994年 (平成6年) 3月には、第69回日本薬理学会年会を国立京都国際会館において、約3200名の国内の薬理学研究者を集めて主催した。また翌1995年 (平成7年) 7月には第15回国際神経化学会を主催し、国内外の多くの研究者との交流を深めた。

現在の薬理学教室の研究テーマは、矢部教授の大学院生時代からのテーマである糖尿病合併症に関する薬理学的研究である。特に糖代謝に深く関わるアルドース還元酵素を介するポリオール代謝異常による糖尿病合併症の発症機構について、その薬物治療法確立をめざして分子生物学的手法を用いて研究を進めているところである。

資料

1. 栗山欣弥教授開講10周年記念教室研究業績目録集 1982年4月
2. 栗山欣弥教授開講20周年記念教室研究業績目録集 (II) 1992年7月
3. 栗山欣弥教授退官記念研究業績目録集 1996年7月

(文責 橋本恒一)

## 衛生学教室

教室の研究内容

教室前責任者永田久紀名誉教授は、昭和25年に衛生学教室助手、同30年講師、同34年助教授を経て、43年教授に就任した。昭和61年に退職しているため、教授在職期間は18年間である。昭和52年から2年間図書館長を兼務した。永田は統計学に造詣が深く、その手法を用いて、1) 体温調節と衣服、2) 小中学生の身長体重分布とその変動の統計的解析、3) 小学生の校内事故の疫学的研究、4) 各種死因の死亡率の年次変化の multiplicative model による解析等の研究を進めてきた。

研究業績は、昭和61年に刊行された退職記念業績集に纏められているが、(1)南極予備観測隊員の防寒衣、皮膚からの水分蒸発に及ぼす衣服の影響、環境温度の急変に対する衣服の調節作用など、日本人の衣生活の衛生学的研究 (稲垣梅子)、(2)疫学的データの統計的解析やその解析法の研究 (浅野弘明)、(3)運動・栄養と発育発達、運動が中高年の血清脂質に及ぼす影響や高齢

者の体力（木村みさか）、(4)死因別死亡率の地域差や経年変化の記述疫学的分析（垂水公男）、(5)幼児・児童の発育の生化学的指標に関する研究（米山京子）、(6)尿中副腎ホルモン代謝産物排泄量の日々及び季節的な変動並びに代謝産物排泄量と室内冷房との関連（石樽清司）等、ごく一部しか紹介できないが、これらは永田久紀の指導で当時のスタッフによってなされた研究のテーマである。

助教授で滋賀医科大学創設にともなって同大学教授に就任した佐々木武史は、本学で(1)騒音問題、(2)山村地域社会、(3)食品衛生、(4)飲酒問題、(5)地域保健問題等広範なテーマの研究を行った。また助教授門脇一郎は、(1)温熱条件の人体への影響や騒音の調査等環境衛生、(2)職域検診の実施と結果の分析、労働疲労性疾患の疫学調査等労働衛生に関する研究を行った。また、戸田正弥は高齢者保健、労働衛生（産業・保健）の研究を行った。

昭和61年11月、本学第三内科学教室助教授阿部達生が教授に就任した。阿部の専門は血液学、がん化学療法、細胞遺伝学で、翌年以降、共同研究者だった稲澤讓治、藪田精昭、前川平らが第三内科から移籍し、これに伴い研究内容が永田の時代から一変した。阿部は内科時代の白血病、悪性リンパ腫の細胞遺伝学、変異原物質の検出法を軸に基礎医学研究に着手したが、2年後文部省重点領域研究の班長に選ばれた。当時分子遺伝学が萌芽していたが、腫瘍関連の遺伝子研究は、細胞遺伝学の知見を前提にしていたので、長くこの領域の研究に従事してきたわれわれの研究は脚光を浴びるところとなった。稲澤は世界的にも他の追従を許さない FISH 法を確立するとともに、多数の遺伝子、遺伝的マーカーを染色体上にマップし、国際協力研究として、特定染色体の物理地図を作成した。現在は multicolour FISH 法や CGH 法も用いて乳がん、腎がん、脳腫瘍など腫瘍の遺伝子診断へと研究を展開させている。前川は、慢性骨髄性白血病（CML）のキメラ融合遺伝子に特異的なアンチセンス DNA を合成、精製、修飾型を作製するとともに、CML に targeting なこの治療の基礎的研究をわが国で最初に行った。稲澤、前川の両名は平成8年東大医科研に移り、研究を続けている。稲澤の研究は嘉数直樹らに引き継がれている。

助教授の藪田は、米国留学中、無血清下での造血幹細胞培養に成功、血球分化に及ぼすサイトカインの機能連鎖を明らかにし、PNAS に報告した。帰国後も一貫してサイトカインによる未分化多能性造血幹細胞の増幅分化制御機構の研究に従事している。最近、助手の木村貴文らと gp130 を介する造血シグナルの研究に着手し、細胞系列特異的因子に依存しない血球産生機構を明らかにした。一方で、産婦人科、小児科との共同研究で、臍帯血幹細胞移植の実現に向けた研究にも取り組んでいる。昨年講師になった奥田司は、留学先の米国セントジュード病院において、わが国で単離され、MTG 8 とのキメラで白血病発生に関与し、転写因子として注目されている細胞性がん遺伝子 AML 1 knockout mouse の作製に世界に先駆けて成功し、AML 1 が胎生期造血に必須の機能を有することを明らかにした。この成果は Cell に掲載され、高い



評価を受けている。

以上が教室の現況であるが、非常に優秀な研究者によって時代の要請に応える impact の大きい研究がなされたのは幸いだった。実際、文部省、厚生省、科技庁等から多数のグラントを受けたが、この間になされた英文の研究論文は250編を越え、著書も50冊を越えている。なお、第三内科のかつての同僚たちによっても同じ領域で優れた研究がなされていることを附記しておく。

(文責 阿部達生)

1973～97年の在職者：教授 永田久紀，阿部達生，助教授 佐々木武史，門脇一郎，藺田精昭，講師 浅野弘明，前川平，稲澤譲治，奥田司，助手 稲垣梅子，米山京子，戸田正弥，木村みさか，石樽清司，垂水公男，上村由樹，嘉数直樹，木村貴文，専門員 大澤登茂子

1973年 (昭和48年)	2月	門脇一郎京都府宮津保健所所長，本学講師 (併任)
1976年 (昭和51年)	3月	助教授佐々木武史退職
1976年 (昭和51年)	4月	滋賀医科大学教授に就任 門脇一郎助教授に昇任
1977年 (昭和52年)	4月	永田久紀大学図書館長に就任，1979年3月まで
1986年 (昭和61年)	3月	永田久紀教授退職
1986年 (昭和61年)	4月	京都府衛生公害研究所長に就任
1986年 (昭和61年)	11月	阿部達生教授に就任
1988年 (昭和63年)	3月	講師石樽清司 退職
1988年 (昭和63年)	4月	広島大学教育学部助教授に転任，引き続き滋賀教育大学助教授に転任
1989年 (平成1年)	4月	浅野弘明講師
1992年 (平成4年)	3月	門脇一郎助教授停年退職
1992年 (平成4年)	4月	阿部達生研究部長，1996年3月まで
1992年 (平成4年)	5月	藺田精昭 助教授に昇任
1993年 (平成5年)	4月	講師浅野弘明医療短期大学部助教授に転任
1993年 (平成5年)	4月	前川平講師
1993年 (平成5年)	4月	稲澤譲治講師
1996年 (平成8年)	1月	講師前川平退職，東京大学医科学研究所病院輸血部講師に転任
1996年 (平成8年)	9月	講師稲澤譲治退職
1996年 (平成8年)	10月	東京大学医科学研究所ゲノム解析センター助教授に転任 (その後，東京医歯大教授に就任)
1996年 (平成8年)	10月	奥田司講師

## 公衆衛生学教室

京都府立医科大学の公衆衛生学教室の歴史は、今は跡形もなくなった鴨川に面した病棟で昭和48年(1973年)10月から始まった。教室は、3階のフロア全体を、病室の雰囲気を残し

たまま利用された。発足当時、スタッフは、川井啓市初代教授の出身の第三内科内視鏡室からの中島、宮岡で構成され、定員が満たされていなかったが、その後ドイツから三崎が講師として呼び戻された。さらに消化器の木本、免疫の山口、薬学の田中、工学の林などの川井教授の教室の研究方針に沿った研究者が次々と教室員として参加した。翌年1974年の5月に現衛生学教授の阿部（翌年より助教授）が赴任した時点で、基礎系でありながら臨床系と同じ9人構成というスタッフが全員揃った。名前こそ衛生学・公衆衛生学教室から分かれた形であったが、この殆ど臨床家で占められる構成は全国的にみても珍しく、教室の英語名も Public Health ではなく Preventive Medicine であった。

教室の研究は、スタッフが揃った翌6月に行われた教室開講記念講演会の発表及び参加者の顔ぶれからも示唆されるように、癌を筆頭とする成人病の予防を大きなテーマとして、特に日本人に最も多い癌である胃癌を当面の対象として、その形態と機能の基礎的研究、癌と深い関係にある老化の問題を免疫学的にアプローチする研究、さらにその遺伝学的アプローチとしての染色体の研究という基礎医学研究と、一方では疾病の二次予防法としてのがん検診や健康検診の実施、及びそのシステムの改善に関する研究と、まさしく基礎から応用までの幅広い内容であった。

教室が主体となって、いわゆる医師過疎地で成人病検診を行うことになったのもこの年からで、検診実施自体が公衆衛生的行動であり、研究対象でもあった。さらに検診はその後夏休みに二カ所で行われたが、いずれかの検診に学生が公衆衛生の実習として参加するということから教育の場としての意味も大きかった。スタッフが9人安定して教室にいたのはこの年だけで、翌年から公衆衛生の教室員の不規則不安定な歴史が始まった。

いわゆる医療センター構想の教室員から府下の保健所長をだすということで、1975年に川井教授自ら宮津保健所所長を併任、山口助手がその主査として出向し、周山保健所所長さらに翌年井手保健所所長となった現京都府立大学松野喜六教授が教室の講師を併任することになった。また胃がん検診と並んで重要な大腸がん検診の担い手として多田が助手となっている。さらに1977年には、赤坂が二人目の助教授となり、阿部助教授が所長として併任していた亀岡保健所の主査として出向している。助手（学内講師）も教室開設時の三人が退職し、同じ第三内科内視鏡室出身の藤本と田中、教室最初の大学院生だった佐々木、さらにイギリスから帰ってきたばかりの木津らが職員となった。これらの人々によって、公衆衛生学教室開設当初から方向付けされた基礎学問分野の一つである胃の機能と形態に関する研究が推進されていった。

1978年には、故青池晟助教授が、また木津に替わり細川が京都大学理学部大学院から助手として赴任し、これにより教室の大きな研究テーマの一つである老化の問題、特にその免疫機能に関する研究が始まることとなった。1979年、六年間慣れ親しんだ鴨川べりの景色を離れて、今は新しい基礎学舎のために大学の建物の歴史の中に埋れようとしている基礎2号館の学生課

跡地に教室が移転し、それと同じ頃に阿部助教授が第三内科へ転任するという大きな変化があった。

次のエポック的な年は1986年であるが、その7年間には1982年に松野助教授が府の衛生部に主査として、引き続き1984年には衛生公害研究所課長として出向し、赤坂助教授は1983年京都府衛生部の理事（翌年技監）として併任することとなった。また三崎講師が同年に退職している。一方池原、森田現医療短大教授、井口が助手にさらに一旦外に出ていた山口が講師として戻り、白枝、小山が助手として採用される中において東（あかね）が教室の最初の女性職員として助手として採用されている。

1986年には、現在の酒井敏行教授と渡辺能行助教授が、ともに医局員から大学院を経て助手になったが、さらにこの年には公衆衛生学教室に教授が二人存在するということが起きた。すなわち赤坂助教授が府衛生部部長に就任するとともに1日間だけ教授となったのである。このような保健行政に絡む人事として、助教授で再び戻ってきた三崎が京都府福祉部理事としてその守備範囲を拡大する一方、酒井が京都府衛生部、渡辺が園部保健所所長に併任の形で出向こととなった。その後助手となった小笹も園部保健所所長として出向している。さらに水谷助教授が向陽保健所所長として1989年から出向して、1996年には東（あかね）が園部保健所所長として出向している。

1996年に前年定年退官直前に退職した川井教授に替わり、酒井教授が誕生し、教室発足時と同じ場所の新基礎医学学舎の8階に移り、川井教授時代に助手となった松川、藤田さらに1997年1月からの原講師等のスタッフを中心として遺伝子調節による新しい癌の予防法や治療法の

京都府立医科大学公衆衛生学教室  
開設記念講演会

プログラム

一、挨拶

京都府立医科大学 佐野 豊 学長

一、胃癌の発生点をめぐって

東京医科大学 村上 忠重 教授

一、ペプシンのラジオ・インムーアッセイ

米国立サンジュルス医科大学 M・I・サムロフ 教授

一、免疫学と公衆衛生学の関与

国立ガンセンター研究所 西岡 久寿弥 教授  
東京大学医学部化学研究所

一、人の癌の進展に関する最近の知見

京都府立医科大学 藤田 哲也 教授

一、胃X線像のパターン認識と計量診断の試み

京都工業繊維大学 相馬 敬司 教授

一、開講にあたって

京都府立医科大学 川井 啓市 教授

司会

京都府立医科大学 増田 正典 教授  
京都府立医科大学 永田 久紀 教授

昭和四十九年六月二十九日

於京都ホテル

開発を新しいテーマとした研究が動き出した。また3月いっぱいまで松川が外の病院に出向して、現在学内は6人になっている。

1973年（昭和48年）	10月	公衆衛生学教室初代教授に川井啓市が就任 教室所在地鴨川沿の旧病棟3階
1974年（昭和49年）	5月	教室定員9名全員揃う
1975年（昭和50年）	1月	阿部達生助教授（専任）
1975年（昭和50年）	6月	阿部助教授周山保健所所長併任
1976年（昭和51年）	6月	阿部助教授亀岡保健所所長併任
1976年（昭和51年）	10月	松野喜六助教授（井手保健所所長併任）
1977年（昭和52年）	4月	赤坂裕三助教授（専任）
1977年（昭和52年）	6月	赤坂裕三助教授亀岡保健所主査併任
1978年（昭和53年）	1月	阿部達生助教授（専任）
1978年（昭和53年）	10月	松野喜六助教授（専任）
1979年（昭和54年）	4月	赤坂裕三助教授八木保健所所長併任
1979年（昭和54年）	10月	教室旧2号館1階に移転 阿部達生助教授第3内科に転任
1981年（昭和56年）	6月	赤坂裕三助教授（専任）
1982年（昭和57年）	4月	松野喜六助教授衛生部保健予防課主査併任
1983年（昭和58年）	4月	川井啓市城陽心身障害福祉センター所長併任
1983年（昭和58年）	11月	赤坂裕三助教授衛生部理事併任
1984年（昭和59年）	4月	赤坂裕三助教授衛生部技監併任 松野喜六助教授衛生公害研究所衛生課長併任
1984年（昭和59年）	6月	青池晟助教授（専任）
1986年（昭和61年）	6月	三崎文夫助教授高齢化対策室室長併任
1986年（昭和61年）	10月	赤坂裕三教授 赤坂裕三教授退任
1989年（平成元年）	4月	三崎文夫助教授退職 水谷昭夫助教授向陽保健所所長併任
1991年（平成3年）	3月	松野喜六助教授退職
1991年（平成3年）	4月	森田益次助教授園部保健所所長併任
1992年（平成4年）	6月	青池晟助教授退職
1993年（平成5年）	3月	森田益次助教授退任（4月より医療短期大学教授転任）
1993年（平成5年）	6月	渡辺能行助教授
1995年（平成7年）	3月	水谷昭夫助教授退職
1995年（平成7年）	9月	川井啓市教授退職
1996年（平成8年）	7月	酒井敏行教授
1996年（平成8年）	10月	教室新基礎医学学舎8階に移転

## 法医学教室

初代教授小片重男は、1957年（昭32）以来、特色ある教室体制を確立し、教育、法医解剖・鑑定や法医学・アルコール医学研究に取り組んできた。また、1965年（昭40）11月創立の日本ア

アルコール医学会の事務所を運営し、学会誌の発行を軌道に乗せ、日本のアルコール医学の発展に多大の貢献をなした。小片は1974年（昭49）3月に停年退官し、本学名誉教授・日本法医学会名誉会員となった。1978年にアルコールおよび薬物依存に関する国際医学シンポジウム（ICAA）の会長として国際的にも名をなし、退官後も活躍した。長年の功績より、1979年に法務大臣賞、1983年に勲三等旭日中綬章を受けたが、1990年（平2）4月29日、79歳で天寿を全うした。

小片の退官後、1974年（昭49）6月、東京大学助教授山澤吉平が2代目の本学教授に着任した。山澤は1953年に本学を卒業し、1年間京都でインターンの時期を過ごした後、東京大学で法医学を専攻し、上野正吉の門下生として活躍していた。本学で山澤は、更に研究を進展させ、西向弘明らと血液型・血清タンパクの遺伝的多型現象に関する研究や井上和美・大洞弓子らとアルコール・アセトアルデヒド代謝に関する研究を中心にすぐれた業績を挙げた。また、アルコール医学会の事務を担当、学会誌の編集・刊行を担い、学会の発展に貢献した。山澤は、多数の司法・法医解剖（本学において約300体）を手がけたが、中でも、「ワラビ採り2主婦殺害事件」が印象深い（付表参照）。山澤はその実務経験を生かして「小法医学書（金芳堂）」を著した。1977年（昭52）4月より、二期4年にわたる学生部長の要職を担い、大学闘争後の難局の中、学生教育環境の改善に尽力した。山澤は温厚な人柄から学生より慕われ、多方面での活躍により将来を嘱望されていたが、1981年（昭56）10月20日、病に倒れ若くして急逝した（51歳）。同年に京都府警察本部長感謝状、正五位勲五等双光旭日章を受けた。

1982年（昭57）5月、滋賀医科大学教授古村節男が第3代の本学教授に迎えられた。古村は本学の法医学教育の他、附属看護専門学校及び医療短期大学部の教育にも力を注いだ。1989年（平1）より1994年まで学生部長を二期務め、入試制度改革への対応に尽力するとともに、学生の教育環境の整備、基礎医学学舎の設計に貢献した。司法・法医解剖は在任中に約600体以上が行われ、世相の変化に応じてか、解剖数は平成以後、増加傾向にあった（付表参照）。「長岡京主婦放火殺人事件」、「船岡山警察官殺害事件」、「スナックママ連続殺人事件」、「山科バラバラ殺人事件」などの事件があった。京都市における監察医制度は1946年より施行されたが、1956年以来業務停止のまま、1985年（昭60）に行政改革の名のもとに廃止された。京都府の死因調査体制の確立が今後の課題となっている。

研究面では、古村は飲酒行動の生理的・社会医学的要因に関する研究を主たるものとした。自由選択的飲酒方法によるアルコール嗜好性の測定法の検討や、アルコール嗜好性動物実験モデルの確立とその応用、アルコール嗜好性と脳内アミンとの関係等の神経薬理学的研究・アルコール及びアセトアルデヒド代謝に関する生化学的・薬物動態学的研究、日本各地における飲酒様態の調査研究、アルコール代謝酵素の地域分布調査、覚醒剤・コカインなどのアルコール代謝阻害の研究などを行った。他方、交通災害における後遺障害に関する賠償医学的研究を行

付表 昭和47年より平成8年までの法医解剖体数 (括弧内は滋賀県)

年	司法解剖数	承諾解剖数	年度合計
昭和47	31 (4)	2	33 (4)
〃 48	32 (4)	0	32 (4)
〃 49	29 (5)	3 (2)	32 (7)
〃 50	45 (13)	2 (2)	47 (15)
〃 51	55 (14)	2 (1)	57 (15)
〃 52	46 (5)	3	49 (5)
〃 53	33	0	33
〃 54	30	0	30
〃 55	33	0	33
〃 56	27	0	27
〃 57	35 (10)	1	36 (10)
〃 58	44 (1)	2	46 (1)
〃 59	55	6	61
〃 60	53	8	61
〃 61	48	3	51
〃 62	48	3	51
〃 63	43	3	46
平成元	41	5	46
平成2	43	2	46
平成3	61	6	67
平成4	60	2	62
平成5	47	3	50
平成6	50	3	53
平成7	58	2	60
平成8	48	4	52
合計	1095 (56)	65 (5)	1160 (61)

うとともに、本学諸教室の協力を得ながら、15年間にわたり医事法民事法研究会を古村は会長として主催し、医事法学的研究を行った。以上は、入澤淑人・伊藤直・吉本寛司・解良芳夫・藤宮龍也・上村公一・大洞弓子・反町吉秀らと共同で研究した。1990年(平2)には第74次日本法医学会総会で特別講演「飲酒行動—生理的・社会医学的要因—」を行った。

古村は1986年（昭61）に第33回日本法医学会近畿地方会会長，第16回日本医事法学会総会世話人になり，1990年（平2）に第1回国際法医学シンポジウム京都サテライトシンポジウム議長及び第25回日本アルコール医学会総会会長，1996年（平8）に第80次日本法医学会総会会長，1993年（平5）11月より2年間日本アルコール医学会理事長を歴任し，多方面で足跡を残した。1996年（平8）8月には待望の新基礎医学学舎が完成，8階へ教室が移転し，法医解剖室は地下1階に置かれた。古村は1984年に京都府警察本部長感謝状，1990年に法務大臣感謝状，1997年に警察庁長官感謝状を受けた。1997年（平9）3月をもって，古村は停年退官し，本学名誉教授並びに日本法医学会名誉会員になった。1997年（平9）は本教室にとって新しい転換の年となった。

（文責 藤宮龍也・大洞弓子）



- |              |     |   |
|--------------|-----|---|
| 1974年（昭和49年） | 3月  | 教授小片重男（法医学）が停年退職し，名誉教授に推薦された（4月）        |
|              | 6月  | 東京大学助教授山澤吉平（本学昭和28年卒業）が，教授（法医学）に任ぜられた。  |
| 1977年（昭和52年） | 4月  | 教授（法医学）山澤吉平が学生部長に補せられた。                 |
| 1981年（昭和56年） | 3月  | 教授（法医学）山澤吉平が学生部長を辞任した。                  |
|              | 10月 | 教授（法医学）山澤吉平（51歳）が死去し，大学と合同葬が行われた。       |
| 1982年（昭和57年） | 5月  | 滋賀医科大学教授古村節男（山口大昭和36年卒業）が教授（法医学）に任ぜられた。 |
| 1983年（昭和58年） | 4月  | 小片重男名誉教授が勲三等旭日中授章を賜る                    |
| 1984年（昭和59年） | 6月  | 講師（法医学）入澤淑人（山口大昭和48年卒業）が助教授に任ぜられた。      |
| 1989年（平成元年）  | 4月  | 教授（法医学）古村節男が学生部長に補せられた。                 |
| 1990年（平成2年）  | 4月  | 名誉教授小片重男（79歳）が死去した。                     |

- 1993年（平成5年） 3月 教授（法医学）古村節男が学生部長を辞任した。
- 3月 助教授（法医学）入澤淑人が鳥取大学教授に転出のため退職した。
- 1995年（平成7年） 4月 講師（法医学）藤宮龍也（滋賀医大昭和56年卒業）助教授に任ぜられた。
- 1997年（平成9年） 3月 教授古村節男（法医学）が停年退職し、名誉教授に推薦された（4月）。